

隠岐魅力UP

目指せ！世界ジオパーク

今年21日、海士町(中ノ島)南端の崎区において、崎師になる登龍門だと考えらる村だんじり(町指定無形文化財)が行われます。約200年前からの伝統行事で、もともと正月の十日エビスに三種神社で奉納されていた豊漁祈願の祭りです。

地元の男子小学生4人を屋台に縛りつけ、約45人の青壮年が担いで左右に傾けながら練り歩きますが、だんじりを「踏む」と表現されるだけあってその動きは力強く、子供が乗るだんじりの揺れはかなりの激しさ。漁師の多い崎では昔から、これを経験することがあるのでしょうか？

荒海に負けない一人前の漁師になる登龍門だと考えられていました。

「チョーサイター！」テン・テン・テン…(だんじり上の子供が太鼓をたたく)という掛け声の「チョー」とは蝶(ちょう)のこと、だんじりのでっぺんには黄色い蝶が載っています。男気あふれる祭りと可愛らしい蝶の組み合わせはちょっと意外ですが、蝶を神様に差し上げる由来はよく分からないとのこと。

ところで、なぜ海士町で崎だんじり、だんじりの伝統があるのでしょうか？

蝶載せた屋台担ぐ



前回(2009年)の「崎村だんじり」—著者撮影

すつきり ワイドに きょうろ3ページ

郷土史に詳しく「じっち 何でも分かる」と絶大な信頼を得ている瀧中茂さん

(82)によると、崎だんじりを伝えたのは、江戸時代の北前船の船員。日本海がしけて休みをもらっていた崎出身の船員が、たまたま西宮でだんじりを見て感動し、持ち帰ったことが始まりだそうです。ただ、崎は道が狭く坂も多いので山車を引くことができず、屋台を担ぐ珍しいスタイルになったということ。

この崎村だんじり、人数を集めて練習を重ねなければならず、開催はたやすいことではありません。かつては毎年でしたが、地域の若者減少に伴って回数も減り、平成元年に行われるまで35年間も中断していた時代があったそうです。しかしそれ以降は伝統継承への

機運が徐々に高まり、前回は平成21年11月、崎だけではコシカキ(担ぎ手)が足りない所以他の地区の若者たちの力も借りて盛大に行われました。

そして今春、「今年を皮切りに、今後は必ず4年に一度開催しよう」と決定。崎の播磨区長は、「若いもの考えを取り入れて決めた。他の地区の皆さんにも支えていただいて、崎だけではない。海士町の宝」として受け継いでいきたい」と語っています。

練習もいよいよ大詰めとなり、日曜は本番。崎に勇壮な掛け声が響きわたるのが楽しみです。

(海士町役場総務課情報政策係 岡本真里菜)